

高大連携による「世界史探究」授業の研究

寺前 駿（和歌山県立和歌山北高等学校教諭）

三品 英憲（和歌山大学教育学部教授）

I 研究の目的

本研究は、2022年度より施行された新学習指導要領で設置された「世界史探究」の授業において、史資料を用いる授業の教材開発をどのように行うのか、また具体的にどのような史資料を用いることが効果的なのかについての諸課題を初歩的に研究することを目的とするものである。本研究では、史資料の選定に際し、歴史学の専門家である大学教員が地理歴史科の高校教員と協働することにより、最新の歴史学の成果を高等学校の世界史授業に取り入れることができると考えた。

また、2022年度より施行された新学習指導要領では、必修科目として「歴史総合」が置かれ、そのうえで選択科目として「日本史探究」「世界史探究」が置かれた。このように「総合」と「探究」という二段階を設定したことが新学習指導要領の特徴である。これにより、高校生は「歴史総合」で現在に直結する近現代史を学んだ上で「世界史探究」「日本史探究」で古代史から学習することになる。『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』の「世界史探究」の「3 内容の取扱い」によれば以下のように記されている。「ア この科目では、中学校までの学習や「歴史総合」の学習との連続性に留意して諸事象を取り上げることにより、生徒が興味・関心をもって世界の歴史を学習できるよう指導を工夫すること。その際、世界の歴史の大きな枠組みと展開を構造的に理解し、考察、構想し、表現すること。」（75頁）。

このように「世界史探究」では、「歴史総合」での学習の成果を踏まえ、さらに深い学びである「探究」の活動に取り組むこととなる。その際、世界の歴史の大きな枠組みと展開を構造的に理解・考察・構想・表現することが求められている。また、今年度実施した研究授業では、歴史的事実をただ単に理解するのではなく、史資料を活用し課題を追究したり解決したりする活動から自らの考えを形成することを重視した。本研究は、「歴史総合」と「世界史探究」の関係を踏まえたうえで、高等学校の世界史の授業においてどのような史資料を用いた授業が、生徒が探究する学びに効果的であるのかについて初歩的に研究するものである。

（文責：寺前・三品）

II 研究の経過

寺前と三品の共同研究は2020年度から始まり、2023年度で4年目である。2020年度から2021年度は「世界史B」の授業の研究、2022年度は「歴史総合」の授業の研究を行った。それぞれの研究の形式は、和歌山北高等学校で寺前が担当する科目の授業を行い、三品がそれを参観し、その後協議するという形で実施した。今年度(2023年度)は、新学習指導要領に盛り込まれた「世界史探究」の授業の研究を行った。研究の形式は昨年度までと同様に、三品が寺前の和歌山北高校の第2学年の「世界史探究」の授業を参観し、その

後協議するという形で実施した。

本年度は3回の研究授業を行った。1回目は、東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質を学ぶ単元のまとめとして、「中国史の転換点はいつか」という問題について生徒たちが史資料をもとに探究し、自らの考えを形成する授業を行った。2回目は、西アジアと地中海周辺の歴史的特質を学ぶ単元のまとめとして、西アジアと地中海周辺の「世界史探究」の教科書2社の記述、以前使用されていた「世界史B」の教科書と現在の「世界史探究」の教科書の記述を比較し、違いを見つけその根拠を生徒が探究する授業を行った。3回目は、宋の社会を学ぶ過程において、南宋の秦檜と岳飛の後の時代の評価が適切かどうかについて、中国の歴史教科書をもとに探究する授業を行った。これら3回の研究授業の全てが、歴史の語られ方について生徒自身が探究し、自らの考えを形成する授業である。その際、歴史学の専門家としての意見を授業前の取り入れ、授業後の協議会で議論を行った。

以下は、今年度実施した研究打ち合わせと授業参観、協議会の記録である。

2023年5月16日（火）14:00～15:30 研究打ち合わせ（和歌山大学）

6月16日（金）9:55～10:45 研究授業2年H組「中国史の時代区分」

8月2日（水）13:00～14:30 協議会、研究打ち合わせ（和歌山大学）

9月22日（金）9:55～10:45 研究授業2年H組「歴史教科書の記述比較」

10月13日（金）13:30～15:00 協議会、研究打ち合わせ（和歌山大学）

11月21日（火）14:25～15:15 研究授業2年H組「中国の歴史教科書の記述」

11月21日（火）15:15～16:30 協議会（和歌山北高等学校）

以上のように、打ち合わせを3回、授業内容に関する研究授業(授業参観)を3回、協議会を3回実施した。

（文責：寺前）

Ⅲ 成果と課題

2023年6月16日に実施した研究授業「中国史の時代区分」では、唐代までの中国の時代を4つに分け、それぞれのグループで探究する活動を行った。そこから各グループのまとめた4つの時代を比較する活動を行い、史資料をもとに「これまで学んだ中国史の時代区分のなかで自分をもっとも時代の大きな変わり目と考える時期はいつですか。」という主発問を考える授業を行った。事前に三品から唐代までの中国史の時代区分として適切な時期として、①春秋時代まで、②戦国時代から前漢、③新・後漢から唐前期、④則天武后（武則天）以降の唐後期、という提案があり、この時代区分をもとに授業を作成した。

協議会では三品から、活動のなかで教員が一方的に生徒に対して用語の説明をするのではなく、生徒が自ら進んで用語を調べようとする姿勢を生む授業になっているとの意見が出た。例えば秦の時代の「郡県制」など政治的に重要な用語の意味を忘れていた生徒が存在したが、それを教員が説明するのではなく、生徒が自ら進んで用語の意味を教科書から調べ、そこから時代の特徴を考えようとする姿勢がみられた。一方で、グループでのそれぞれの時代を探究する活動に時間がかかったこともあり、主発問に対して、根拠をもって答える生徒が少ないという課題が生じた。

次に 9 月 22 日に実施した研究授業「歴史教科書の記述比較」を実施した。旧学習指導要領の「世界史 B」から新学習指導要領の「世界史探究」に変化したことによって、旧学習指導要領では「(2)ア 西アジア世界・地中海世界」と「(3)ア イスラーム世界の形成と拡大」、「(3)イ ヨーロッパ世界の形成と展開」と分けられていた部分が、新学習指導要領では「B(3)ア(ウ) 西アジアと地中海周辺の諸国家、キリスト教とイスラームの成立とそれらを基盤とした国家の形成」としてまとめられている。この変化を「世界史 B」の帝国書院『新詳世界史 B』と「世界史探究」の帝国書院『新詳世界史探究』と山川出版社『詳説世界史』の 3 つの教科書から読み取り、なぜ 1 つにまとめられたのかを探究する授業である。事前に寺前が三品に授業案を提示したときには、その他の書籍の文章を読み取る活動を用意していたが、授業検討するなかで高校生には難しいこと、教科書比較をするためには教科書のみから読み取ることができる内容から活動を行うべきとのことから、その他の書籍を採用することはしなかった。これらを踏まえつつ、また前回の研究授業の反省を活かし、主発問での探究する活動に重点を置くため、その他のサブの発問を「なぜ」「どのように」といった考えることに時間がかかる発問を作らないようにした。授業では、主発問として「なぜ新教科書(帝国)では、オリエント文明、古代ギリシアから 10 世紀ごろのヨーロッパ、西アジアまでの時代、地域を 1 つの章にまとめたのか、A～D の解答をもとに答えなさい。」を設定した。

協議会では、参観された和歌山北高等学校の教員から、「教科書比較という方法は学習指導要領の位置付けとどのように関係があるのか。」との質問があった。確かに、学習指導要領の内容をそのまま今回の授業を位置付けることは難しいかもしれないが、「B(3)イ(ウ) 西アジアと地中海周辺の歴史に関わる諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互の関わりなどに着目し、主題を設定し、諸資料を比較したり関連付けたりして読み解き、西アジアと地中海周辺の諸国家の社会や文化の特色、キリスト教とイスラームを基盤とした国家の特徴などを多面的・多角的に考察し、表現すること。」とあるため、複数の教科書という諸資料を比較し特徴を多面的・多角的に考察、表現するができていると考えられるとの結論になった。また、教科書に記述されている内容は常に同じではなく、教科書を記述する者によって変化するものであるということを生徒が意識することができたとしてこの授業の成果がみられた。

11 月 21 日に研究授業「中国の歴史教科書の記述」を実施した。授業の導入では、1 学年に「歴史総合」で学習した現在の中国の政治について振り返る。そして、前時の復習として南宋と金の関係を振り返り、資料として、現代の中国にある秦檜と岳飛の像の写真を提示し、「資料の様子から現在の中国では秦檜、岳飛はどのように扱われているのだろうか？」と生徒へ問いかけた。生徒は、秦檜に対して「奴隷のよう」「悪人」などと答え、岳飛に対して「王様」「えらい人」「強さで人を従わせる」と答えた。ここで現在の中国において秦檜が非常に低い評価、岳飛が高い評価もしくは「力強い」存在であると認識することになった。その上で、丸橋充拓『江南の発展 南宋まで シリーズ中国の歴史②』(2020 年、岩波書店)より秦檜の政治家としての功績も存在することを引用した。その資料を生徒が読み取り「資料の筆者は、現代の中国での秦檜の評価に対して肯定的か、否定的だろうか？」と問いかけた。こうして、秦檜が現代の中国での秦檜の低い評価は、必ずしも適切なものではないとの視点があると生徒たちに気付かせた。続いて、小野寺史郎『中国ナショナリ

ズム』(2017年、中公新書)を引用し、現代の中国政府は、漢族を中心に中国の領域内の少数民族を一体化させる「中華民族」としての民族的同一性を強調する姿勢がみられることを取り上げ、「資料より、中国政府の公式見解の「中華民族」とはどのようなものか文章中から抜き出そう。」と問いかけた。そして、課程研究所編、並木頼寿監訳『中国の歴史と社会』(2009年、明石書店)から現在の中国の教科書における秦檜と岳飛の記述と中村哲『東アジアの歴史教科書はどう書かれているか』(2004年、日本評論社)から1950年代の中国の教科書における秦檜と岳飛の記述から「資料の中国の教科書では、秦檜と岳飛についてのどのような理由で評価しているだろう?」と問いかけ、それぞれのグループで読み取る活動を行った。現在の中国の教科書を読み取った生徒の記述では、秦檜は「[評価は]低い。文章に書かれていないから。」など、岳飛は「[評価は]高い。ぬれぎぬをかけられて殺された」と表現しているから。」などとあった。また、1950年代の中国の教科書を読った生徒の記述では、秦檜は「講和、投降を主張したことによって、[評価が]低い」などとあり、岳飛は「国のために立ち向かった者として、高い」などとあった。そして、主発問として「中国の教科書の秦檜と岳飛の語られ方はどの程度正しいと考えるか?もしくはどの程度正しくないと考えるか?変えるべき点があるとすればどこだろう?」と自らの考えを導きだす活動を行った。生徒の記述は、次ページに【参考資料】として掲載している。これらを踏まえて授業の最後に「他のクラスメイトの意見を聴き、価値観の異なる他者とわかり合うために私たちはどのように歴史を学ぶべきだろう?」と記述を呼びかけ終了した。生徒の記述には「色々な情報を集めて学んでいく。ちがう教科書を見たり、ネットでくわしくしらべる。」「当時や現代の人の賛否の両方の意見をしっかりと聞くことが大切。多数派だけでなく少数派の話も聞くことで、考え方が変わるかもしれない。」「昔の人の気持ちになって学ぶべき」「歴史を学ぶ際、価値観の異なる他者とわかり合うために、お互いの意見を尊ちょうし合い、お互いの意見を理解し合おうと考えることが大切だと思う。」などがあった。これらの記述から生徒たちは、歴史をただ暗記する科目と捉えるのではなく、価値観の異なる他者との対話のために歴史を学ぶのだとの意識が生まれていることがわかる。ここからは、冒頭の研究の目的で記した、歴史的事実をただ単に理解するのではなく、史資料を活用し、課題を追究したり解決したりする活動から自らの考えを形成することが、一定程度達成できたと評価できるものと考えられる。

協議会では、三品より現在の中国の教科書と1950年代の中国の教科書を並列してグループで探究するのではなく、1950年代の中国の教科書から現在の中国の教科書の記述の変化を探究する方が良いのではないかとの意見が出た。変化を探究することにより、1950年代と現在の東アジアを取り巻く国際情勢が変化していることが読み取ることができ、「歴史総合」との繋がりを生むことができるとの結論が出た。そのため、その後に行った別のクラスの「世界史探究」の授業では、変化を読み取る活動に変更した。

以上が研究授業のそれぞれの概要である。成果としては、1回目の時代区分の考え方、2回目の教科書比較という方法、3つ目の秦檜と岳飛の現在の中国での語られ方、といった大学教員の歴史学の専門的知識を高校の授業に取り入れることが、これまで以上に効果的に実施できたことがある。また、昨年度から課題としていた「世界史探究」と「歴史総合」との関連や生徒の思考力の育成につながる「問い」の作成を3回の研究授業を通じて一定程度の成果があげられたと考えられる。

今後の課題としては、歴史学の専門的知識を大学教員から受けた高校教員として歴史教育の考え方をより高度にする必要がある。より効果的な生徒の思考力の育成につながる「問い」の作成のために高校の歴史教員として、教科教育の専門性を高めることの重要性を改めて理解した。来年度以降も、「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」に関する研究を行い、課題の解決に向けて積極的に取り組んでいきたい。

(文責：寺前)

【参考資料】(生徒の解答(写真))

正しくない。

・悪いところしかかかれていないから、
自分たちの目せんた"け"がいてる。

正當時本当に全員が、このように感じていたのか、違うように思っていた人もいると思われ、その意見も書くた方がいい、と思った。現代の人々の考えも書きた方がいい、と思った。

文章に秦檜のこゝと書かれていたり、ゆ木"ゆ"を
あてている岳飛だったりとするので、このようにこゝとをゆめ、
皆、平等に^{書かせる}~~書かせる~~べきだ"と思う。